



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ツングース諸語における副動詞語尾-miの相違について
Author(s)	白, 尚燁
Citation	北方言語研究, 4, 85-110
Issue Date	2014
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55121
Type	departmental bulletin paper
File Information	nls-4-07.pdf



ツングース諸語における副動詞語尾 *-mi* の相違について

白 尚 燐

（北海道大学大学院博士課程）

0. はじめに

0.1. 副動詞語尾 *-mi*

本稿は、副動詞の通言語的パラメータ（0.3.で後述）に基づき、ツングース諸語の副動詞語尾 *-mi*¹（以下‘副動詞-*mi*’とする）に見られる言語間の差異が、その分布地域（ロシア領と中国領）によって顕著に現れることについて論じる。

表1. 先行記述による副動詞-*mi*の定義²

I	Ek	時間・条件副動詞（Konstantinova 1968: <i>-mī</i> , Nedjalkov, I. V. 1995 / 1997: <i>-mi</i> ），条件副動詞（Bulatova & Grenoble 1999: <i>-mī</i> ）
	E	時間副動詞?（Benzing 1955: <i>-mi</i> ），時間・条件副動詞（Novikova 1968: <i>-mī</i> ³ ），条件副動詞（Malchukov 1995, 風間 2003 / Kim 2011: <i>-mi</i> ）
	N	時間・条件副動詞（Kolesnikova & Konstantinova 1968: <i>-mi</i> ），条件副動詞（Cincius 1982: <i>-mī</i> , 風間 2002: <i>-mi</i> ）
	S	非完了副動詞（Poppe 1931: <i>-mi</i> ），連合副動詞（朝克 et al. 1991: <i>-m</i> ），等位副動詞（Tsumagari 2009a: <i>-mi</i> ）
II	U	現在時制副動詞（Shnejder 1936 / Girfanova 2002: <i>-mi</i> ），不定形（Nikolaeva & Tolskaya 2001: <i>-mi</i> ），同時副動詞（Girfanova 2002 / 風間 2010a: <i>-mi</i> ）
	Oc	同時副動詞（Avrorin & Boldyrev 2001: <i>-mi</i> ）
	Hx	連合副動詞（An 1986 / 李 2006: <i>-mi</i> ），同時副動詞（Tamura 2008: <i>-mi</i> ），不定形（Zhang 2013: <i>-mi</i> ）
III	Nn	同時副動詞（Avrorin 1961: <i>-mi</i> , 風間 2010b: <i>-mi</i> ）
	Ol	同時副動詞（Sunik 1985: <i>-mi</i> , 風間 2010c: <i>-mi</i> ）
	Ut	同時副動詞（Petrova 1967: <i>-mi</i> ），時間・条件副動詞?（Ikegami 2001a [1959]: <i>-mi</i> ），等位副動詞（Tsumagari 2009b: <i>-mi</i> ）

¹ ツングース諸語の副動詞-*mi*は、言語によってその母音の形式が少しずつ異なっているが、本稿では便宜上-*mi*をその代表形として用いる。但し、個々の言語に限定して記述する場合は、その言語における特定の形式で表記する。

² 本稿では、Benzing（1956: 142-143）に従って副動詞-*mi*をツングース諸語同起源の形式と見なして議論を進める。これはその音韻対応や意味機能からみて同源の形式である可能性が高いと考えられるためである。

³ -*l*は、先行する動詞語幹の母音によって、-*i*~*l*のように母音調和されるその代表形を示す。

IV	M	現在副動詞 (Zakharov 1897: -me) , 非完了副動詞 (Sung 1968 / 河内&清瀬 2002 / Li 2000 / Gorelova 2002: -me) , 同時副動詞 (Avrorin 2000: -me) , 不定形 (津曲 2002: -me)
	Sb	並列副動詞 (Li & Chong 1986: -m(e), 児倉 2007: -mee) , 未完了連用形語尾 (Norman 1974 / 久保 et al. 2011: -me)

副動詞-*mi*は、ツングース諸語に共通して類似した形式や意味用法が見られる。そのため、同形式はツングース諸語同起源の形式であるという見方が一般的である。上記の表1は、ツングース諸語⁴の副動詞-*mi*に関する先行記述をまとめたものである。

まず、第I群の副動詞-*mi*は、主に条件用法に注目した定義が最も多い。しかし、同じく第I群に属するが、中国領に分布するソロン語の副動詞-*mi*にはこのような記述は見られない。次に、第II-III群の副動詞-*mi*は、同時に起こる二つの動作を結びつける同時用法に着眼した先行記述が一般的である。最後に、第IV群では同形式が非完了または並列副動詞として見なされていて、これはソロン語やホジェン語と類似している。要するに、副動詞-*mi*に関する従来の先行記述を見ると、その言語群や分布地域によってその定義が少しずつ異なっていることが確認できる。

0.2. 先行記述

今までの先行記述⁵のうち、副動詞-*mi*に見られる言語間の相違点に注目した記述には Benzing (1956) 、風間 (2003, 2010a, 2010b) がある。下記のBenzing (1956) は、満洲語の副動詞-*me*による目的用法の用例 (正確には移動の目的: *ara-me dosi-ka* : write-CONV enter-PTCP.PST 「彼は書くために入った」) をあげ、満洲語の副動詞-*me*が他のツングース諸語の副動詞-*mi*に見られる通常の意味機能から離れていると記述している。

Die Bedeutung im Ma. (Supinum: *ara.me dosi-ka* 'er ging hinein um zu schreiben') weicht von der sonst in den tg. Sprachen üblichen Bedeutung ab: 'während man ... tut', 'als ein ... Tuender', z. B. udh. *mahi bi.mi, atahi dāu* 'kräftig seiend, wirst du nicht ermüden'.

Benzing 1956: 143

一方、風間 (2003, 2010a, 2010b) は、ツングース諸語の第I群における副動詞-*mi*が第III群と違って、数による変化形を持たない点と、主に条件用法として用いられる点を取り上げ、副動詞-*mi*が言語によって多少異なっていると指摘している。

全ツングースに同源の形式があるが、機能は少しずつ異なっている。

風間 2003: 170

⁴ 本稿におけるツングース諸語の分類は、次のIkegami [2001b (1974)]にしたがう【第I群: エウエンキ一語(Ek)、エウエン語(E)、ソロン語(S)、ネギダル語(N)、第II群: ウデヘ語(U)、オロチ語(Oc)、第III群: ナーナイ語(Nn)、ウルチャ語(Ol)、ウイльта語(Ut)、第IV群: 満洲語(M)】。さらに、本稿ではホジェン語(Hz)とシベ語(Sb)に関する先行研究も参照する。ホジェン語は風間 (1996) に基づいてツングース諸語の第II群に入れて検討する。

⁵ ツングース諸語内の比較を行った他の先行文献 (Ramstedt 1952: 110-111, Poppe 1965: 195-196) からは、言語間に見られる副動詞-*mi*の差異に注目した記述は見られない。

I 群の言語では、これ（＝ウデヘ語の副動詞 *-mi*：筆者注）と同源の形式は[中略]条件用法がその主たる用法になっている。

風間 2010a: 224

I 群の言語における *-mi* は数による変化形を持たず、もっぱら条件的な用法でのみ用いられる。ナーナイ語の *-mi* (sg.)/ *-mAAri* (pl.) をはじめとする III 群の言語の形式と同語源のものと考えたいが、なお疑問は残る。

風間 2010b: 244

しかし、これらの先行記述は、言語間に見られる副動詞 *-mi* の差異について、簡単に触れているだけである。また、このような副動詞 *-mi* の違いが何に起因しているかについても述べられていない。

0.3. 研究方法

本稿は、副動詞の通言語的パラメータ（以下参照）を形態・統語特徴と意味機能の二つに分けて副動詞 *-mi* について考察する。このパラメータ⁶は Nedjalkov, V. P. (1995)、Haspelmath (1995)、Bisang (1995) に基づいて、筆者が作成したものである（但し、一部のパラメータは筆者による：ボールド標示）。また副動詞の意味用法においては、Nedjalkov, V. P. (1995) 以外に Dixon (2009) による通言語的観点から見た節連結（clause linking）の意味機能の類型も参照する。

(1) 形態・統語特徴

①数の標示 ②指示転換 ③補助動詞 ④引用標識

(2) 意味機能

①同時 ②先行 ③理由 ④目的 ⑤条件

さらに、副動詞 *-mi* の違いがツングース諸語の分布地域による可能性を検討するにあたって、津曲 (1996)、Tsumagari (1997) にならい、個々の言語の分布域に基づき、ロシア領ツングース諸語と中国領ツングース諸語の二つに分ける。

・ロシア領ツングース諸語：エウエンキー語、エウエン語、ネギダル語、ウデヘ語、オロチ語、ナーナイ語、ウルチャ語、ウイルタ語

・中国領ツングース諸語：ソロン語、ホジェン語、満洲語（シベ語）

本稿で、ロシア領ツングース諸語については、副動詞 *-mi* に関する先行記述がもっとも充実している言語（エウエンキー語、ウデヘ語、ナーナイ語）に限定する。一方、中国領ツングース諸語はソロン語、ホジェン語、満洲語を対象とする。

⁶ 本稿における副動詞の通言語的パラメータは、以下の先行研究に基づく。

①態・統語特徴：指示転換 Nedjalkov, V. P. (1995), 引用標識 Haspelmath (1995), 補助動詞 Bisang (1995)

②意味機能：Nedjalkov, V. P. (1995), Dixon (2009)

0. 4. 研究資料

本稿における副動詞-*mi*の差異に関する考察は以下の資料にもとづく⁷。

0. 4. 1. ロシア領ツングース諸語

①エウエンキー語 (第Ⅰ群)

- ・先行研究: Konstantinova (1968)、Nedjalkov, I. V. (1995, 1997)、Bulatova & Grenoble (1999)
- ・テキスト: Vasilevic (1936)、池上 (2002)

②ウデヘ語 (第Ⅱ群)

- ・先行研究: Shnejder (1936)、Kormushin (1998)、Girfanova (2002)、風間 (2010a)
- ・テキスト: 風間 (2004, 2006a, 2007a, 2008a, 2009, 2010a)、カンチュガ (2010)

③ナーナイ語 (第Ⅲ群)

- ・先行研究: Avrorin (1961)、風間 (2010b, 2011a)
- ・テキスト: 風間 (2005, 2006b, 2007b, 2008b, 2010b)

0. 4. 2. 中国領ツングース諸語

④ソロン語 (第Ⅰ群)

- ・先行研究: Poppe (1931)、朝克 et al. (1991)、津曲 (2009a)、風間 (2011b)
- ・テキスト: 風間 (2007c, 2008c)

⑤ホジェン語 (第Ⅱ群)

- ・先行研究: An (1986)、李 (2006)、Tamura (2008)、Zhang (2013)
- ・テキスト: Tamura (2008)、李 (2011, 2012)

⑥満洲語 (第Ⅳ群)

- ・先行研究: Zakharov (1897)、Sung (1968)、津曲 (1981, 2002)、Li (2000)、Avrorin (2000)、Gorelova (2002)、河内&清瀬 (2002)
- ・テキスト: Choi et al. (2012a, 2012b)

1. 形態・統語特徴

1. 1. 数の標示

副動詞には従属節における主語の数 (単数／複数) によって数が標示されうる副動詞と、数の情報が標示されない副動詞が存在する。

1. 1. 1. エウエンキー語

Nedjalkov, I. V. (1995: 445) によれば、エウエンキー語の副動詞-*mi*は従属節の主語が複数である場合、副動詞-*mi*の後に複数接辞 (plural suffix) -*l*を用いて主語の複数を示しうると記述されている。その用例を以下に示す。

- 1) *ju-la-wer* *eme-mi-l*, *jep-čo-tin*⁸.
house-DIR-REF.PL come-CONV-PL eat-PST-3PL

⁷ 本稿における表記、グロス、和訳はすべて筆者によるもので、原典と異なることがある。また各言語における方言差は、特に言及がない限り、考慮しないことを断っておく。

⁸ 本稿のツングース諸語の表記において、*/e/*の実際の音価は[ə]であるが、便宜上*/e/*で表記する。

「彼らは自分の家へ来て食べた。」

Nedjalkov, I. V. 1995: 445

1. 1. 2. ウデヘ語

ウデヘ語の副動詞-*mi*も、Shnejder (1936: 121)、Kormushin (1998: 97)、風間 (2010a: 223) で指摘されているように、数を標示することができる。しかし、この数の標示の仕方は、上記のエウエンキー語と違って、副動詞-*mi*自体に単数・複数形 (-*mi*、-*mAi*) が存在する。このような副動詞-*mi*の数標示の仕方⁹は、ツングース諸語の第Ⅱ-Ⅲ群の多く（オロチ語、ナーナイ語、ウルチャ語、ウイльта語）に共通して見られる現象である。

- 2) *tuu gekti-mei, bude-e-ti.*
all get freezed-CONV.PL die-PTCP.PST-3PL
 「（彼らは）みんな凍えて死んだ。」

Kormushin 1998: 97

1. 1. 3. ナーナイ語

風間 (2010b: 243) によると、ナーナイ語の副動詞-*mi*¹⁰は単数形-*mi*・複数形-*mAri*のように数によって変化すると記されている。

- 3) *em modan=tanii xupi-meeri=tenii, enin-či-ji jju-xe-či.*
one time=CLT play-CONV.PL=CLT mother-DIR-REF return-PTCP.PST-3PL
 「（彼らは）ある時に遊んでいて、自分の母親のところへ戻ってきた。」

風間 2010b: 142

1. 1. 4. ソロン語

ソロン語に関する文献（Poppe 1931, Tsumagari 2009a）およびテキスト（風間2007c, 2008c）に基づき、ソロン語の副動詞-*mi*は上記のロシア領に分布するツングース諸語と違って、数の標示がなされないと考えられる。

- 4) *emun buxul ewenke aımag-sel bongon nuulgii-m,*
one all Ewenki community-PL all move.out-CONV
nuulgii-m ul-ji-see=site.
move.out-CONV go-PROG-PST=CLT
 「全員のエウエンクの部落達がみんなで、引越しして行っていたのだ。」

風間2007c: 67

1. 1. 5. ホジェン語

ホジェン語の副動詞-*mi*においても、下記の用例のように、数の情報は示されない。

⁹ しかし、ウデヘ語の副動詞-*mi*におけるこのような数の対立は、風間 (2010a: 223) の記述通り、北のホル方言のみ存在し、南のピキン方言には確認できない。つまり、従属節の主語が単数／複数に関わらず、常に-*mi*が用いられる。

¹⁰ ナーナイ語の先行記述（風間 2010b: 244）を見ると、ナーナイ語の副動詞-*mi*の歴史的形成について次のように述べられている。

（ナーナイ語の副動詞-*mi*は＝筆者注）歴史的には何らかの名詞化接辞-*m*に再帰人称接辞 (-*ji* (sg.)／-*Ari* (pl.))が連続することによって形成されたものと考えられる。

もしこの通時的な考察にしたがうと、ナーナイ語の副動詞-*mi*は人称や数の標示がなされることになる。しかし、本稿ではこのような通時的なプロセスは考慮せず、共時的な姿にのみ注目して考察を行う。

- 5) *tigurun xofur xofur sokutu-mi omi-xe-ti.*
 they OMTP get.drunk-CONV drink-PTCP.PST-3PL
 「彼らは酔いながら飲んだ。」

Tamura 2008: 43

1. 1. 6. 満洲語

満洲語は、動詞構造に人称や数の標示が見られないため、副動詞-*me*に数に関わる情報が標示されることはない。

- 6) *muse tere gašan de gene-fi bele hūlaša-me*
 we.INCL that village DAT go-ANT.CONV rice exchange-CONV
buda ara-me je-fi gene-ki.
 cooked.rice make-CONV eat-ANT.CONV go-OPT
 「我々はその村に行って、米を交換し、ご飯を作り、食べて行こう。」

津曲 1981: 152

1. 2. 指示転換¹¹

Nedjalkov, V. P. (1995) によると、副動詞は従属節と主節の主語が一致するかによって、下記の三つのタイプ（①同主語副動詞、②異主語副動詞、③同・異主語副動詞）に分類できると記述されている。

図1. 指示転換による副動詞の分類 (Nedjalkov, V. P. 1995: 110に基づいて筆者が作成)

- | |
|---|
| (1) 同主語副動詞 (<i>Same-subject</i> converbs) : where the converb subject and the subject of the superordinate verb are always coreferential
(2) 異主語副動詞 (<i>Different-subject</i> converbs) : where the converb subject and the subject of the superordinate verb are never coreferential
(3) 同・異主語副動詞 (<i>Varying-subject</i> converbs) : both in same-subject and in different-subject |
|---|

1. 2. 1. エウエンキー語

エウエンキー語の副動詞-*mi*は、Nedjalkov, I. V. (1995: 445) で示されているように、原則的に従属節と主節が同一主語である場合に用いられる形式である¹²。

1. 2. 2. ウデヘ語

風間 (2010a: 223) によれば、ウデヘ語の副動詞は非人称副動詞と人称副動詞に分類でき、非人称副動詞は基本的に従属節と主節の主語が同じである場合に用いられる形式であると述べられている。すなわち、非人称副動詞である-*mi* は原則的に従属節と主節の主語が同じである場合に用いられる形式であると考えられる¹³。

¹¹ Nedjalkov, V. P. (1995) は、同指示性 (coreferentiality) という用語を使っているが、本稿ではそれを指示転換に取り換えて論じる。

¹² Nedjalkov, I. V. (1995: 458-459) では、同主語をとる副動詞が異主語を許す現象についても触れている。しかし、このように同主語副動詞が異主語をとる場合は非常に限られている (Nedjalkov, I. V. *ibid.*) という。

¹³ 但し、風間 (2010a: 224) では、ウデヘ語の副動詞-*mi*が条件と逆接用法で用いられる場合、異主語を許すことがあると記している。

1.2.3. ナーナイ語

風間（2010b: 243）によると、ナーナイ語の非人称副動詞は、ふつう従属節と主節の主語が一致している場合に用いられると記述されている。そのため、ナーナイ語の副動詞-*mi* も原則的に同主語の環境で用いられる形式であると考えられる。

1.2.4. ソロン語

ソロン語の副動詞-*mi* も、Tsumagari（2009a: 10）で示されているように、原則的には同主語の環境で用いられる副動詞である。

1.2.5. ホジェン語

ホジェン語の先行記述（An 1986, 李 2006, Tamura 2008）を見る限り、指示転換に関する記述は見られない。しかし副動詞-*mi* は、人称標示が成されない非人称副動詞であるため、同一主語の文で用いられる可能性が高い。実際、ホジェン語のテキスト（Tamura 2008, 李 2011, 2012）に基づき、副動詞-*mi* が異主語を許す用例を調べたが、確認できなかった。

1.2.6. 満洲語

指示転換の観点から満洲語の副動詞を分類した津曲（2002: 89）を見ると、満洲語の副動詞は、①従属節と主節が同主語を取る同主語マーカの副動詞と、②異主語をとる異主語マーカの副動詞、二つに分類されると記述されている。要するに、同主語マーカの副動詞に属する副動詞-*me* は、原則的に従属節と主節の主語が一致する場合に用いられる副動詞語尾であると考えられる¹⁴。

1.3. 補助動詞

本稿における補助動詞は、「動詞2が別の動詞1（副動詞と結合）に後続することにより、動詞2の本来の語彙的意味¹⁵を失い、文法的機能（時制・アスペクト・ムードなど）を示すようになった動詞」と定義する。

ツングース諸語の補助動詞（アルタイ諸語を含め）に関しては、風間（2013）の記述（以下参照：下線は筆者による）がある。これは、ツングース諸語において補助動詞は一般的な現象ではなく、周辺言語（モンゴル語や中国語）の影響によって生じた可能性を示唆している記述である。

徹底したアルタイ型の言語であれば、こうした補助動詞は存在しにくいものではないかと考える。実際にアルタイ諸言語の中でも、モンゴル語族の言語の多くには補助動詞が揃っているが、ツングース語族やチュルク語族の言語では内部に差がある。ツングース諸語の大部分では補助動詞は発達していないが、モンゴル語や中国語と接触のある（／あった）ソロン語や満洲語、シベ語には多くの補助動詞がある。

風間 2013: 8

¹⁴ 津曲（2002: 90）によれば、満洲語の副動詞-*me* は別の主語を明示して、異主語を許す現象もあると述べられている。但し、副動詞-*me* による異主語現象は極めて少ないと津曲（ibid.）には記されている。

¹⁵ 但し、動詞2の位置で補助動詞として働く動詞が、動詞1の位置に来る場合は本来の語彙的意味が維持される。

風間氏によるこの記述を念頭に置いて、副動詞-*mi*による補助動詞用法について検討する。本稿では、補助動詞の多様な用法のうち、次の四つの用法①進行・継続「～ている」、②試行「～てみる」、③授受「～てあげる／くれる」、④完了「～ておく」に限定して考察を進める¹⁶。

1.3.1. エウエンキー語

①進行・継続「～ている」

風間 (2011b) では、エウエンキー語にはコピュラ動詞（以下では存在動詞）による進行・継続の補助動詞用法は存在しないと記述している。これは本稿で扱ったエウエンキー語の資料においても同じ結果であった。つまり、エウエンキー語の副動詞-*mi*にはコピュラ動詞と結合して進行・継続を示す時制・アスペクトの用法は見られない。

ツングース諸語のうち、ナーナイ語などには現在進行を示す明示的な形式がなく、現在進行中の動作にも単なる現在形が用いられる。一方、エウエンキー語などには現在進行のアスペクトを示す接辞-*ji*がある。したがって日本語やモンゴル語などのように存在の動詞を用いたアスペクト、すなわち「～ている」のような表現は存在しない。

風間 2011b: 171

②試行「～てみる」、③授受「～てあげる／くれる」、④完了「～ておく」

また、エウエンキー語の副動詞-*mi*には、上記の三つの補助動詞に関する記述や用例も確認できない。

1.3.2. ウデヘ語

①進行・継続「～ている」

一方、ウデヘ語の副動詞-*mi*は、コピュラ動詞-*bi*-と結合して進行・継続の時制・アスペクトを示す機能が見られる。下記の用例はウデヘ語テキストによるものである。

7) *uti etete-ne-mi, jeu diga-mi bi-i-ti.*
those work-DIRINT-CONV what eat-CONV be-PTCP.PRS-3PL
「あいつらは働きに行って、何を食べているんだ。」

風間 2004: 383

②試行「～てみる」、③授受「～てあげる／くれる」、④完了「～ておく」

上記の②～④について、先行研究やテキストからは見つからず、筆者の調査でもすべて非文と判断された。

1.3.3. ナーナイ語

①進行・継続「～ている」

ナーナイ語のテキストを見ると、副動詞-*mi*とコピュラ動詞を組み合わせで進行・継続の時制・アスペクトを表す用例が確認できる。その用例を以下に示す。

¹⁶ 本稿では、紙面や資料の制約で上記の四つの用法に限定した。これは、上記の四つの用法を用いた場合、言語間の差異が明確に現れると考えられたためである。また、副動詞-*mi*を用いる可能（～できる）、開始（～しはじめる）などの用法は、すべての言語に共通して見られるため、排除した。

- 8) simbie elee ĵara-li-i elee ĵara-li-i=ja murči-mi
 you.SG.ACC now speak-INC-PTCP.PRS now speak-INC-PTCP.PRS=CLT think-CONV
xalači-mi bi-či-mbi.
 wait-CONV be-PTCP.PST-1SG

「あなたがもう話すかしら、もう話すかしらと思って待っていたのよ。」

風間 2008b: 105

②試行「～てみる」、③授受「～てあげる／くれる」、④完了「～ておく」

しかし、本稿で扱ったナーナイ語の先行研究とテキストを参照しても、ナーナイ語の副動詞-*mi*に上記の三つの補助動詞用法に関する記述や用例は確認できない。

1. 3. 4. ソロン語

①進行・継続「～ている」

ソロン語の副動詞-*mi*は、Tsumagari (2009a) で示されているように、コピュラ動詞と連結して進行・継続を示す時制・アスペクト機能が見られる¹⁷。

9) aasi-mi bi-see.

sleep-CONV be-PST

「(彼は)眠っていた。」

Tsumagari 2009a: 10

②試行「～てみる」

ソロン語の副動詞-*mi*は、風間 (2011b: 169) で指摘されているように、試行を示す補助動詞の用法が見られる。

- 10) ĵege-we-n teĵteri-m iččee gunen.
 jaw-ACC-3 stroke-CONV see.PTCP.PST say

「彼の顎をなでてみたという。」

風間2008c : 49

③授受「～てあげる／くれる」

ソロン語の副動詞-*mi*は、以下に提示された用例のように、動詞*buu-*「あげる」と結合して授受の意味を表す。これに関しても、Tsumagari (2009a: 10)、風間 (2011b: 169) で触れられている。

- 11) agĵi11 sibbaa-m buu-se gunen.
 wisdom give-CONV give-PTCP.PST say

「知恵を授けてくれたという。」

風間 2008c : 21

④完了「～ておく」

本稿で参照したソロン語の先行研究とテキストからは、これに当てはまる記述や用例は確認できない¹⁸。

¹⁷ 但し、風間 (2011b : 171-172) によると、ソロン語の進行・継続アスペクトは、現在進行を示す接辞-*ĵi*で表されることもあると指摘されている (本稿の用例25参照)。

¹⁸ Tsumagari (2009a)、風間 (2011b: 169-170) では、動詞*nee-*「置く」が先行副動詞と結合して完了の補助動詞として機能していることに触れている。

1.3.5. ホジェン語

①進行・継続「～ている」

李 (2006) の記述のとおり、ホジェン語の副動詞-*mi*はコピュラ動詞との結合で進行・継続のアスペクトを示す構造の文を成す。

- 12) su arki-we **omi-mi** **biyi-su?**
you.PL.NOM liquor-ACC drink-CONV be.PROG.PRS-2PL
「あなたたちは酒を飲んでいるか。」

李 2006 : 58

②試行「～てみる」

ホジェン語にも、副動詞-*mi*による「試行」の補助動詞用法が見られる。但し、動詞-*ičie*-「見る」は、その形態位置からみて、副動詞-*mi*と結合して接尾辞化されている可能性が考えられる¹⁹。

- 13) bi edin-me **gele-m-ičie-mi.**
I wind-ACC seek-CONV-see-1SG
「私が風を探してみる。」

Tamura 2008: 46

③授受「～てあげる／くれる」、④完了「～ておく」

ホジェン語に関する先行研究 (An 1986、李 2006) とテキスト (Tamura 2008、李 2011、2012) を参照した結果、③・④の補助動詞の記述と用例は確認できない。

1.3.6. 満洲語

①進行・継続「～ている」

満洲語の副動詞-*me*も、下記の用例のように、コピュラ動詞と結びついてある動作が進行・継続していることを示す時制・アスペクト的な働きをする。これに関しては多くの先行研究 (Sung 1968、Gorelova 2002、河内&清瀬 2002) が指摘している。

- 14) hūwang dzoo ba be **tuwakiya-me** **bi-he** se-me ala-mbi.
Hwangcaoba ACC watch-CONV be-PTCP.PST say-CONV say-IMPF
「黄草坝を見張っていたと言う。」

Choi et al. 2012b: 111

②試行「～てみる」

満洲語の副動詞-*me*は、下記のように、動詞*tuwa*-「見る」とともに用いられて「～てみる」という補助動詞の意味用法を示す。

- 15) siyanseng **leole-me** **tuwa-ø.**
teacher think-CONV see-IMP
「先生、考えてみて。」

Sung 1968: 78

③授受「～てあげる／くれる」

満洲語の副動詞-*me*は、動詞*bu*-「あげる」と連結して授受を示す補助動詞として機能す

¹⁹ Tamura (2008: 39) では、-*mičie*を試み (attempt) 「～してみる」の単一接辞として記述している。

る。

- 16) hahai ĵaka be haha de **faksala-me** **bu-fi** ungg-i-Ø.
 man.GEN thing ACC man DAT divide-CONV give-ANT.CONV send-IMP
 「男の物を男に分けてやって送れ。」

Sung 1968 : 79

④完了「～ておく」

満洲語の副動詞-*me*には、下記のように、完了を示す補助動詞の用法もある。

- 17) gemu saikan boo-de **dosim-bu-me** **sinda-Ø.**
 all well house-DAT enter-CAUS-CONV put-IMP
 「皆よく家に入らせておけ。」

Choi et al. 2012a : 403

1. 4. 引用標識

Haspelmath (1995: 40)によると、多くの言語には「話す、言う」のような伝達動詞と副動詞の結合による引用標識化の文法現象が見られるという。さらに、このような構造の形式は伝達または思考動詞の補文を示す際にも用いられると指摘している。本稿では、伝達動詞と副動詞-*mi*の結合によって、日本語の「～と」に値する引用標識の文法現象が各言語に確認できるか検討する。

1. 4. 1. エウエンキー語

本稿におけるエウエンキー語の先行研究やテキストを参照しても、伝達動詞と副動詞-*mi*を用いて引用節を標示する文法現象は確認できない。エウエンキー語の引用節は、特別な標識を用いず、そのまま文に挿入される。

1. 4. 2. ウデヘ語

ウデヘ語テキスト及び実地調査においても、伝達動詞と副動詞-*mi*の結合による引用標識の用法は確認できない。ウデヘ語にも、エウエンキー語と同じく、引用標識は存在しない。

1. 4. 3. ナーナイ語

ナーナイ語においても、伝達動詞に-*mi*が接続した形式が引用文の標識として機能する用例は見られない。しかし、風間 (2010b) によると、ナーナイ語には引用マーカー【=*m ~ =mAl* (pl.)²⁰】が引用を示す機能があると説明されている。

- 18) ča-do nee-mi aja bi-ĵeree=*m* un-dii-ni.
 that-DAT put-CONV good be-FUT=CLT say-PTCP.PRS-3SG
 「“そこにおけばよいだろう”と言う。」

風間 2010b: 259

1. 4. 4. ソロン語

Tsumagari (2009a)、風間 (2011b) によると、ソロン語には*gunken*と言う形式が引用標識として機能すると記述されている（下記の用例参照）。これは、風間 (2011b) で指摘さ

²⁰ ナーナイ語に見られるこの引用マーカーは、副動詞-*mi*と類似した形式であるため、同源である可能性も考えられるが、確かではない。

れているように、動詞*gun-*「話す」と関係づけられる形式であると考えられる。しかし、この動詞に副動詞-*mi*が付いて引用マーカーとして機能する用例は見られないため、ソロン語の副動詞-*mi*に引用標識の機能はないと見なす。

- 19) *sii ilee nenendi gujken miniii exinbel anʊʊ-saa*
 you where go.PRS.2SG saying I.GEN older sister ask-PST
 「“あなたはどこに行くの”と私の姉は訊いた。」

風間 2011b: 164

1.4.5. ホジェン語

ホジェン語の副動詞-*mi*は、伝達動詞として用いられる動詞*ne-*「する、言う」と結びつき、引用マーカーとして機能する。

- 20) *niani minuwe tumaki nian-dule-ni ene-ru ne-m xesu-yi-ni.*
 he I.ACC tomorrow he-DIR-3SG go-IMP do or say-CONV say-PTCP.NPST-3SG
 「彼は、“明日私に自分のところへ来なさい”と言った。」

李 2006 : 65

1.4.6. 満洲語

満洲語の副動詞-*me*は、以下のように伝達動詞*se-*「言う」と結びついて引用節を受ける文法機能を果たす。これに関しては、多くの先行研究（Sung 1968, 津曲 2002, Gorelova 2002）によって指摘されている。

- 21) *doose geren i baru suwe omi-me ele-he=o*
 monk everybody GEN toward you.PL drink-CONV enough-PTCP.PST=CLT
se-me fonji-ha de.
 say-CONV ask-PTCP.PST DAT
 「お坊さんが皆の方に“君たち、飲むことが足りたかい”とたずねたときに。」

Gorelova 2002: 274

2. 意味機能

Nedjalkov, V. P. (1995: 106) は、副動詞をその意味機能に基づいて通言語的に分析し、次の三つのタイプ①特定副動詞 (specialized converb)、②文脈副動詞 (context converb)、③物語副動詞 (narrative converb) に分類している。ツングース諸語の副動詞-*mi*は、この副動詞の意味類型に基づくと、文脈によって多様な意味用法が見られる文脈副動詞の範疇に入る副動詞である。要するに、副動詞-*mi*に何らかの特定の意味があるのではなく、従属節と主節の文脈によって異なる意味用法が示されるということである。本稿では、文脈副動詞による多様な意味機能 (Nedjalkov, V. P. 1995: 108) のうち、以下の五つの用法に限定して考察を行う²¹：①同時 ②先行 ③理由 ④目的 ⑤条件。また、個々の意味用法においては、Dixon (2009) による通言語的観点から見た節連結 (clause linking) の意味機能の類型も参照する。

²¹ 但し、副動詞-*mi*は、上記で述べたように、文脈によってその意味解釈が異なる文脈副動詞であるため、同じ構造の文であっても文脈によって異なる解釈が成される可能性がある。

2. 1. 同時

本稿でいう同時用法は、従属節の動作が主節の動作と同時に行為される意味機能を指す。

2. 1. 1. エウエンキー語

エウエンキー語の副動詞 *-mi* には、下記の用例のように、同時用法が見られる。Nedjalkov, I. V. (1995: 455) では、エウエンキー語の副動詞 *-mi* による同時と先行用法は、従属節動詞のあとに非完了アスペクト *-jA* が付加されるか否か（付加される場合：同時、付加されない場合：先行）によって区別されるという。

- 22) *agi-li gene-je-mi, denk'e-l-we wa-wki.*
 forest-PROL go-IMPF-CONV sable-PL-ACC kill-HAB.PTCP
 「森に沿って行きながら、クロテンを獲る。」

Nedjalkov, I. V. 1995b: 456

2. 1. 2. ウデヘ語

ウデヘ語テキスト及び実地調査においても、副動詞 *-mi* による同時用法はもっとも頻度が高い用法である。その用例を以下に示す。

- 23) *site-fi igisi-mi, bagdi-a-ti.*
 child-REF.PL bring up-CONV live-PTCP.PST-3PL
 「（かれらは）自分の子どもを育てながら、暮らした。」

風間 2010a: 223

2. 1. 3. ナーナイ語

ナーナイ語の副動詞 *-mi* においても、このような同時用法が見られる。従来の先行研究（Avrorin 1961, 風間 2010b）でも、同時用法を副動詞 *-mi* の主たる意味機能として取り上げている。

- 24) *songo-mi, ili-si-i-ni.*
 cry-CONV stand-DUR-PTCP.PRS-3SG
 「（彼は）泣きながら、立っている。」

風間 2010b: 243

2. 1. 4. ソロン語

ソロン語の副動詞 *-mi* も、同時に起こる従属節と主節の動作を結びつける意味機能が見られる。下記の用例は、ソロン語テキストによるものである。

- 25) *ta-du dooloo-mi, ilisi-ji-re-n gunen.*
 that-DAT sing-CONV stand-PROG-PTCP.PRS-3 say
 「そこで歌いながら立っているという。」

風間 2008c: 61

2. 1. 5. ホジェン語

ホジェン語の副動詞 *-mi* も、同様に同時用法が見られる。

- 26) *tigurun xofur xofur sokutu-mi, omi-xe-ti.*
 they (onomatopoeia) get drunk-CONV drink-PTCP.PST-3PL

「彼らは酔いながら飲んだ。」

Tamura 2008: 43

2. 1. 6. 満洲語

満洲語の副動詞-*me*も、同時に起こる二つの文を結合する機能がある。

- 27) si morin be **bošo-me**, tuba-de gama-fi.
you.SG.NOM horse ACC hurry-CONV that place-DAT take-ANT.CONV
「あなたが馬を追い立てながら、そこに連れて行って~」

津曲 2002: 62

2. 2. 先行²²

本稿における先行用法は、Dixon (2009: 9) に従って「従属節の動作が完了した後、主節の動作が実行される意味機能」を指す。このような先行用法は、その統語特徴から重文構造の文を成すと考えられる。

2. 2. 1. エウエンキー語

Nedjalkov, I. V. (1995) では、副動詞-*mi*を用いて連続する出来事を示す先行用法が存在すると記述している。

- 28) sama-sel **eme-mi**, asi-wa-n iče-re-ø.
shaman-PL come-CONV woman-ACC-3SG see-NFUT-3PL
「シャマンたちは来て、彼の妻を見た。」

Nedjalkov, I. V. 1995: 456

2. 2. 2. ウデヘ語

ウデヘ語の副動詞-*mi*にも、下記のように先行用法が見られる。下記はウデヘ語テキストによる用例である。

- 29) timaa timaa **tee-gi-mi**, njaa ηene-kte-i=lie.
morning morning sit-REP-CONV again go-DISTR-PTCP.PRS=CLT
「朝早く起きて、再び皆出ていくのだ。」

風間 2004: 38

2. 2. 3. ナーナイ語

ナーナイ語テキストを参照した結果、ナーナイ語の副動詞-*mi*にも先行用法に当てはまる用例が確認できる。

- 30) deure-mi **jiu-mi**, mapaačaan=tanii un-dii.
walk-CONV return-CONV grandfather=CLT say-PTCP.PRS
「歩いて戻ってきて爺さんに言う。」

風間 2007b: 161

²² 上記のツングース諸語には、それぞれ専用の先行副動詞が存在する。そのため、副動詞-*mi*と先行副動詞による先行用法の違いについて疑問が生じる。これに関しては明確に検証されていないが、先行の意味用法は、先行副動詞によって表されるのが一般的である。一方副動詞-*mi*による先行用法はその頻度が低く、さらに従属節と主節の出来事の間における時差がほぼ同時に近いほど短いという特徴があると考えられる。

2. 2. 4. ソロン語

ソロン語の副動詞-*mi*にも、下記の用例のように先行用法が見られる。

- 31) too-ččɪ see **baxa-m**, ɪm-saa-soŋ=gee?
 that-ANT.CONV tea get-CONV drink-PST-2PL=CLT
 「それで（あなたたちは）お茶をもらって飲んだのか。」

風間2008c: 49

2. 2. 5. ホジェン語

ホジェン語の副動詞-*mi*にも、先行用法が存在する。下記はホジェン語のテキストによる用例である。

- 32) jiu **gada-m** jefu-uyi.
 just buy-CONV eat-IMPRS
 「ただ買って食べるしかない。」

李 2011: 203

2. 2. 6. 満洲語

満洲語の副動詞-*me*にも、従属節と主節の間に一定の時間的間隔を置く先行用法が見られる。

- 33) mujilen ončo tondo be **tuwa-me** tukiye-ki=dere.
 heart generous fair ACC see-CONV appoint-OPT=CLT
 「心の広さ、正しさをみて登用したい。」

Sung 1968: 77

2. 3. 理由

本稿でいう理由用法は、Dixon (2009: 17) に従って、従属節が主節によって示される状態や動作の原因・理由を示す用法と定義する。

2. 3. 1. エウエンキー語

Nedjalkov, I. V. (1995, 1997) では、副動詞-*mi*による理由用法について記述し、下記のような用例を取り上げている。

- 34) eŋesi **bi-mi**, ɲorča-mači-mu-ja-ča-n.
 strong be-CONV fight-RECP-VOL-IMPF-PST-3SG
 「（彼は）強かったため、戦いたがっていた。」

Nedjalkov, I. V. 1995: 456

2. 3. 2. ウデヘ語

ウデヘ語の副動詞-*mi*でも同じく理由の意味機能が確認できる。下記の用例は、ウデヘ語実地調査によるものである。

- 35) nuani maŋga **bi-mi**, uti sagdi jolo-wo uinde-mi mute-i-ni.
 he strong be-CONV that big stone-ACC lift up-CONV can-PTCP.PRS-3SG
 「彼は強いため、その大きい石を持ち上げることができる。」

2.3.3. ナーナイ語

Avrorin (1961: 142) では、ナーナイ語の副動詞-*mi*による従属節が二番目の動作（＝主節）の原因を表す用法があると示している。この副動詞-*mi*による理由機能は、ナーナイ語テキストにおいても確認できる。

- 36) xainaa~ min-ji **asila-go-iča-mi,** aksa-xa-ni bi-ĵeree.
perhaps I-INS marry-REP-INT-CONV get.angry-PTCP.PST-3SG be-FUT
「たぶん私を妻としてみたくてムツとしているのだろう。」

風間 2005: 22

2.3.4. ソロン語

ソロン語のテキストを参照した結果、以下のように、ソロン語の副動詞-*mi*による理由用法の用例が確認できる。

- 37) tugerii erin-du **begii-mi,** ettuu xagaru-ĵi-ran unti-gii=ge.
winter time-DAT feel.cold-CONV like.this get.heat-PROG-PTCP.PRS NEG-?=CLT
「冬の時に寒がっていて、このように火に当たっているのじゃないか。」

風間2007c: 22

2.3.5. ホジェン語

本稿で扱ったホジェン語の文献から、副動詞-*mi*による理由の用例は確認できないが、ホジェン語の副動詞-*mi*に連続する二つの出来事を示す先行用法が見られることから、従属節が主節に起こる出来事の原因になる用法が存在する可能性は高いと考えられる。

2.3.6. 満洲語

Sung (1968: 82) では、「満洲語の副動詞-*me*が結合した形式は、次に来る主動作の原因または理由を示すことがある」と述べている。以下にその用例を示す。

- 38) nei tuči-fi uksin su-he niyalma **geče-me,**
sweat come.out-ANT.CONV armor take.off-PTCP.PST person get.freed-CONV
ambula buču-he.
a lot die-PTCP.PST
「汗が出て、鎧を脱いだ人が凍えて大いに死んだ。」

Sung 1968: 83

2.4. 目的

副動詞-*mi*に目的を示す意味用法が見られるかについても検討する。本稿でいう目的用法は、Dixon (2009: 17) にしたがって、主節の動作が従属節の動作を成立させるために自発的に遂行される文を指す。そのため動作の時間的順序は、主節の動作が従属節の動作に先行する。本稿では主節に移動動詞が来る場合に現れる目的用法を移動の目的と、主節に移動以外の動詞が用いられる目的用法を通常の目的、二つに分け、各言語の副動詞-*mi*にこれらの用法があるか確認する。

2.4.1. エウエンキー語

本稿で参照したエウエンキー語の資料から、副動詞-*mi*が移動動詞の前に現れて移動の

目的を示す記述や用例は確認できない。またエウエンキー語の副動詞 *-mi* は、通常の目的節を形成する機能も見られない。Nedjalkov, I. V. (1995, 1997) では、エウエンキー語の目的節が、目的副動詞 *-daa*, *-wuna* によって示されると記している。

- 39) *bi nungan-dula-n tuksa-ča-w dukuwun-ma-s buu-dee-wi.*
 I he-DIR-3SG run-PST-1SG letter-ACC-2SG give-PURP.CONV-REF.SG
 「私は君の手紙を渡すために、彼のほうへ走った。」

Nedjalkov, I. V. 1997: 52

2.4.2. ウデヘ語

ウデヘ語の副動詞 *-mi* には、以下のように主節に移動動詞が用いられる際、移動の目的節を構成する用法がある²³。この場合、動詞語幹と副動詞 *-mi* の間に移動の目的を示す接辞 *-nA* が用いられることが一般的である²⁴。しかし、副動詞 *-mi* が通常の目的節を構成することはない。ウデヘ語における通常の目的節は、目的副動詞 *-IA(gA)* によって表される。

- 40) *jegde-ne-mi eme-ø-i sii?*
 get.burned-DIRINT-CONV come-PRS-2SG you-SG.NOM
 「焼けるために来たのか、おまえは。」

風間 2004: 137

2.4.3. ナーナイ語

Avrorin (1961: 143) によれば、ナーナイ語の副動詞 *-mi* は、主節に移動動詞が現れる際に、目的を示す意味用法があると記述されている。この記述やナーナイ語テキストによる用例を見ると、ウデヘ語と同様に動詞語幹と副動詞 *-mi* の間に移動の目的を示す接辞 (*-ndA*、または *-nA*) が用いられる構文が多いが、動詞語幹と副動詞 *-mi* だけで移動の目的を示すものもある。一方、副動詞 *-mi* で移動以外の目的を示す用法は確認できない。ナーナイ語における通常の目的節は、目的副動詞 *-(pO)gO* によって示される (風間 2010b: 243 参照)。

- 41) *nai-ja neeluči-ne-mi ji-dee, ui orki-ni=a*
 person-ACC surprise-DIRINT-CONV come-ANT.CONV who bad-3SG=CLT
un-dii-ni=goani.
 say-PTCP.PRS-3SG=CLT
 「人を驚かせに来て、誰が悪いのかと言うのだ。」

風間 2007b: 142

2.4.4. ソロン語

ソロン語の副動詞 *-mi* にも、下記のように主節に移動動詞が来る場合に移動の目的を示す機能がある。この場合、移動の目的を示す接辞 *-nAA* がともに用いられるのがふつうだが、この形式が見られない用例もある。一方、本稿におけるソロン語の資料から、移動以

²³ ウデヘ語と同じく第Ⅱ群に属するオロチ語の文法記述 (Avrorin & Boldyrev 2001) でも、オロチ語の副動詞 *-mi* に移動の目的 (動詞語幹 *-nA-mi* または動詞語幹 *-mi* + 移動動詞の構造) を示す機能があると指摘している。

²⁴ 移動の目的を示す接辞 *-nA* とともに用いられ、移動の目的節を構成できる副動詞は *-mi* のみである。これに関しては、以下のナーナイ語、ソロン語、ホジェン語、満洲語も同じである。

外の目的節と考えられる用例は確認できなかった。そのためソロン語の副動詞-*mi*に通常の目的を示す用法があるかの判断は保留しておく。

- 42) *too-čči bejuusi-nee-m ul-čee gunen.*
that.ANT.CONV hunt-DIRINT-CONV go-PTCP.PST say
「そしてこの人は狩りをしに行った。」

風間2008c : 45

2.4.5. ホジェン語

An (1986)、李 (2006)、Zhang (2013) では、ホジェン語の-*nemi*を主節の動作が行われる目的を示す目的副動詞として定義している。この副動詞は、移動の目的を示す接辞-*nA*と副動詞-*mi*で分析することもできる。したがって、ホジェン語の副動詞-*mi*にも移動動詞と結びついて移動の目的を表す機能があると判断できる。下記は、動詞語幹と副動詞-*mi*だけで移動の目的を示す用例である。さらにホジェン語の副動詞-*mi*は、接辞-*nA*と結合して通常の目的を示すこともできる (43-2参照)。

- 43-1) *ši iau ne-mi eme-xe-ši, minewe ĵiafan-xe-ši.*
you.SG.NOM what do-CONV come-PTCP.PST-2SG I.ACC come.to.get-PTCP.PST-2SG
「お前は何をしに来たのか。私を捕らえに来たのか」

Tamura 2008 : 52

- 43-2) *bi elbči-xtči-ne-mi muke-we ĵigde-xtči-mi.*
I bath-INT-DIRINT-CONV water-ACC boil-INT-1SG
「私は入浴するため、お湯を沸かそうとしている。」

Zhang 2013 : 137

2.4.6. 満洲語

満洲語の副動詞-*me*にも、二つの目的用法が存在する。まず、上記のツングース諸語と同じく、主節に移動動詞が来る際、移動の目的節を構成する (以下の用例44-1参照)。この場合には上記のツングース諸語と同じく、従属節の動詞と副動詞-*me*の間に移動の接辞-*nA*が用いられることもある。また、満洲語の副動詞-*me*は、下記の用例44-2)のように、主節に移動動詞が用いられない場合でも、目的節を構成することができる。副動詞-*me*だけで通常の目的節を成す点においては、満洲語がホジェン語と異なっている。

- 44-1) *bi booha uda-me gene-re.*
I snack buy-CONV go-PTCP.FUT
「私は肴を買いに行く。」

津曲 1981: 154

- 44-2) *sain kooli be ala-bu-me baitala-ki.*
good example ACC notify-CAUS-CONV use-OPT
「よい例を告げさせるために用いたい。」

ibid. 155

2.5. 条件²⁵

条件文に関するDixon (2009) の記述によれば、条件文は二つのタイプ (①可能条件と②非現実条件) に分類できると記されている。

①可能条件 (Possible conditional) : 従属節によって表される未成立の条件が満たされる可能性があり、その動作の実現によって主節の出来事が遂行される条件文である。

a) If you come this afternoon, we'll write the report together.

Dixon 2009: 16

②非現実条件 (Counterfactual conditional) : いわゆる事実と反する条件文である。

b) If you had come yesterday, we could have written the report together.

ibid. 16

本稿では、上記の条件文の類型に基づき、副動詞-*mi*が条件節を構成する機能があるか確認する²⁶。

2.5.1. エウエンキー語

エウエンキー語の副動詞-*mi*は、可能条件と非現実条件の文を形成することができる。Nedjalkov, I. V. (1995: 455) によれば、エウエンキー語の副動詞-*mi*が条件用法として解釈されるのは、主節の動詞が仮定法、命令法、未来時制である場合であると記している。Nedjalkov, I. V. (1997: 54) では、本動詞に仮定法が用いられる場合に非現実条件文を構成すると記している。

・可能条件

45-1) aja-t hawa-l-mii-l beje-l oo-jaŋaa-sun.
good-INS work-INC-CONV-PL person-PL become-FUT-2PL

「もしあなたたちがよく働き始めたら、人間になるだろう。」

Bulatova & Grenoble 1999: 44

・非現実条件

45-2) asatkan-me ajaw-mi, asila-mča-w.
girl-ACC love-CONV marry-SUBJ-1SG

「もし私がこの女の子を愛していたら、結婚したのに。」

Nedjalkov, I. V. 1997: 54

2.5.2. ウデヘ語

ウデヘ語の副動詞-*mi*も、Shnejder (1936) , Girfanova (2002) , 風間 (2010a) で指摘されているように、条件節を形成することができる。条件の解釈は、上記のエウエンキーと同じく、主節の動詞述語に未来時制、命令法、仮定法が来る際に成される。ウデヘ語の副

²⁵ 各言語には専用の条件副動詞がある。エウエンキー語、ウデヘ語、ナーナイ語など副動詞-*mi*による条件用法が見られる言語においては、条件を示す副動詞が複数存在することになる。副動詞-*mi*と専用の条件副動詞による条件用法の違いは、明らかに検証されていないが、次のことが考えられる。条件副動詞は異主語の文に限られるが、副動詞-*mi*を用いる条件用法は同主語の文に多く用いられる。但し、例外も見られるため、これに関しては更なる研究が必要である。

²⁶ 但し、本稿では「春になると、花が咲く」のように、従属節と主節が法則的關係に近い恒常条件は排除する。

動詞-*mi*も、エウエンキー語と同様に、主要動詞に仮定法が来ると、現実と反する非現実条件文を構成する。下記はウデヘ語先行研究とテキストによる用例である。

・可能条件

- 46-1) **čaala-mi** **diga-ja-u.**
agree-CONV eat-IMP-2PL
「同意するなら、食べなさい。」

風間 2010a: 224

・非現実条件

- 46-2) **janami** **wa-a-i?**
why kill-PTCP.PST-2SG
sii **uta-wa, igbe-gi-mi** **kule** **e-muse** **bie.**
you.SG.NOM that-ACC drive.away-REP-CONV enough NEG-SUB be.PRS
「なんだって殺したの、あなたはそれを、追い払えば十分じゃない。」

カンチュガ 2010: 47

2.5.3. ナーナイ語

風間 (2010b, 2011a) では、下記のようにナーナイ語の副動詞-*mi*にも、条件文を構成する用法が見られると記述している。これは、本稿でいう可能条件に近い用法と考えられる。しかし、本稿で参照したナーナイ語のテキストから、非現実条件の用例は確認できない。

・可能条件

- 47) **bumbie** **mana-mi,** **sumbie** **waa-nda-jaraa.**
we.ACC finish-CONV you.ACC kill-DIRINT-FUT
「彼らは我らを片付けたら、あなたたちを殺すだろう。」

風間 2010b: 244

2.5.4. ソロン語

本稿で扱ったソロン語の先行研究とテキストから、ソロン語の副動詞-*mi*による条件用法と見なされる記述と用例は確認できない。ソロン語における条件文は、条件副動詞-*kki*によって示される。

2.5.5. ホジェン語

ホジェン語の先行研究 (An 1986, 李 2007) とテキスト (Tamura 2008, 李 2011, 2012) を参照し、副動詞-*mi*による条件用法を調べてみたが、このような用例は見つからない。ホジェン語の条件文は、条件専用副動詞-*ki*で表される。

2.5.6. 満洲語

先行研究 (Zakharov 1897, Sung 1968, 津曲 1981, 2001, 河内&清瀬 2002, Li 2000, Avrorin 2000) とテキスト (Choi et al. 2012a, 2012b) を見る限り、満洲語の副動詞-*me*による条件用法に関する記述や用例は見られない²⁷。満洲語の条件文は、副動詞-*ci* によって示される。

²⁷ 但し、満洲語の副動詞-*me*が条件の意味用法を示すという指摘が全くないわけではない。Gorelova (2002: 267-268) は、満洲語の副動詞-*me*に同時以外に条件、理由、目的などの意味機能が見られると記している。しかし、Gorelova (2002) では、ここでいう条件 (condition) がどのような意味用法であるか

3. まとめ

本稿は、副動詞の通言語的パラメータを取り入れ、ツングース諸語の副動詞 *-mi* における言語間の差異がその分布地域によっている可能性について考察を行った。その結果を以下の表2で示す。

表2. 副動詞の通言語的パラメータから見たツングース諸語の副動詞 *-mi* (差異が見られるところを網掛けで表示)

		ロシア領			中国領		
		Ek	U	Nn	S	Hz	M
形態・統語	数の標示 (単数・複数)	+	+	+	-	-	-
	指示転換	-	-	-	-	-	-
	補助動詞①進行・継続	-	+	+	+	+	+
	補助動詞②試行	-	-	-	+	+	+
	補助動詞③授受	-	-	-	+	-	+
	補助動詞④完了	-	-	-	-	-	+
	引用標識	-	-	-	-	+	+
意味	同時	+	+	+	+	+	+
	先行	+	+	+	+	+	+
	理由	+	+	+	+	?	+
	目的①移動の目的	-	+	+	+	+	+
	目的②通常の目的	-	-	-	?	+	+
	条件	+	+	+	-	-	-

ツングース諸語の副動詞 *-mi* の形態・意味的特徴の差異は、大きく二つのグループ（ロシア領と中国領ツングース諸語）に分類できる。両グループは、形態・統語特徴（数の標示、補助動詞、引用標識）において、異なっていることがわかる。また副動詞 *-mi* の意味用法については、多くの用法（同時、先行、理由、移動の目的）に共通点が見られるが、通常の目的と条件用法において両グループに違いが見られる。この結果に基づくと、言語間に見られる副動詞 *-mi* の差異は系統的な対立（第Ⅰ群～第Ⅲ群と第Ⅳ群）というより、その地理的要因が大きく関わっている可能性が考えられる。但し、同じ地域に分布する言語間でも複数標示の手段、補助動詞の発達の度合い、引用標識、目的用法の違いが確認できる。これは、この地理的要因による影響の大きさの違いあるいは個々の言語内部の変化による結果であると推定される。

本稿では、副動詞 *-mi* の差異がその分布地域による可能性について論じた。しかし、こ

は明確に記述していない。また、副動詞 *-me* が条件用法として機能している用例も確認できない。

のような分布地域による違いが何に起因するかに関してはまだ明らかではない。これを明確にするためには、周辺言語の副動詞について検討する必要がある。これに関しては今後の課題とする。

略号一覧

1: first person	GEN: genitive	PL: plural
2: second person	HAB: habitual	PROL: prolative
3: third person	IMP: imperative	PROG: progressive
ACC: accusative	IMPF: imperfect	PRS: present
ANT: anteriority	IMPRS: impersonal	PST: past
CAUS: causative	INC: inchoative	PTCP: participle
CLT: clitic	INCL: inclusive	PURP: purposive
COND: conditional	INS: instrumental	RECP: reciprocal
CONV: converb	INT: intentional	REF: reflexive
DAT: dative	NEG: negative	REP: repetitive
DIR: directive	NFUT: non-future	SG: single
DIRINT: direct-intentional	NOM: nominative	SUBJ: subjunctive
DISTR: distributive	NPST: non-past	VOL: volitional
DUR: durative	OMTP: onomatopoeia	=: clitic boundary
FUT: future	OPT: optative	

謝辞

本稿の作成にあたり、日頃よりご指導を下さった津曲敏郎先生に心より感謝を申し上げます。また査読者の先生からも多くのご教示や指摘を頂き、本稿の改訂に大いに参考させていただいた。ここで記して感謝を申し上げたい。当然ながら、本稿における全ての誤りは筆者に帰するものである。

参考文献

- 池上二良 2002 『ツングース・満洲諸語資料訳解』 北海道大学図書刊行会
- 風間伸次郎 1996 「ヘジェン語の系統的位罫について」 『言語研究』 109 : 117-139
- 風間伸次郎 2002 『ネギダール語テキストと文法概説』 (ELPR publication series: A2-021, ツングース言語文化論集 19) 吹田 : 大阪学院大学情報学部
- 風間伸次郎 2003 『エウエン語テキストと文法概説』 (ELPR publication series: A2-030, ツングース言語文化論集 23) 吹田 : 大阪学院大学情報学部
- 風間伸次郎 2004 『ウデヘ語テキスト (A)』 (ツングース言語文化論集 24/A) 東京 : 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 風間伸次郎 2005 『ナーナイの民話と伝説 8』 (ツングース言語文化論集 27) 千葉 : 千葉大学文学部

- 風間伸次郎 2006a『ウデヘ語テキスト 2』（ツングース言語文化論集 31）東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 風間伸次郎 2006b『ナーナイの民話と伝説 9』（ツングース言語文化論集 32）千葉：千葉大学文学部
- 風間伸次郎 2007a『ウデヘ語テキスト 3』（ツングース言語文化論集 35）札幌：北海道大学大学院文学研究科
- 風間伸次郎 2007b『ナーナイの民話と伝説 10』（ツングース言語文化論集 36）札幌：北海道大学大学院文学研究科
- 風間伸次郎 2007c『ソロンの民話と伝説 1』（ツングース言語文化論集 37）札幌：北海道大学大学院文学研究科
- 風間伸次郎 2008a『ウデヘ語テキスト 4』（ツングース言語文化論集 42）東京：東京外国語大学
- 風間伸次郎 2008b『ナーナイの民話と伝説 11』（ツングース言語文化論集 40）札幌：北海道大学大学院文学研究科
- 風間伸次郎 2008c『ソロンの民話と伝説 2』（ツングース言語文化論集 41）東京：東京外国語大学
- 風間伸次郎 2009『ウデヘ語テキスト 5』（ツングース言語文化論集 44）東京：東京外国語大学
- 風間伸次郎 2010a『ウデヘ語テキスト 6』（ツングース言語文化論集 47）東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 風間伸次郎 2010b『ナーナイの民話と伝説 12』（ツングース言語文化論集 48）東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 風間伸次郎 2010c『ウルチャロ承文芸原文集 5』（ツングース言語文化論集 49）東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 風間伸次郎 2011a「ナーナイ語の複文について：条件形式の使い分けを中心として」『北方言語研究』1: 115-138. 北方言語ネットワーク（編）北海道大学大学院文学研究科
- 風間伸次郎 2011b「ソロン語におけるモンゴル語の影響」『言語の研究Ⅱーユーラシア諸言からの視座ー』: 163-183. 寺村正男・福盛貴弘（編）東京：大東文化大学語学教育研究所
- 風間伸次郎 2013「類型なのか、言語地域なのか？ー日本語は北東アジアの言語なのか?ー」日本言語学会第146回予稿集：4-9. 日本言語学会
- 河内良弘・清瀬義三郎則 2002『満洲語文語入門』京都：京都大学学術出版会
- カンチュガ、A. 2010『ウデヘ語自伝テキスト 2：青年時代』（津曲敏郎編訳）（ツングース言語文化論集 50）札幌：北海道大学大学院文学研究科
- 久保智之・児倉徳和・庄声 2011『シベ語テキスト1：シベ語の基礎』平成23年度言語研修：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 児倉徳和 2007「シベ語（満洲語口語）」『文法を描く：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』Ⅱ：131-157. 中山俊秀，山越康裕編 東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所

- 朝克・津曲敏郎・風間伸次郎 1991『ソロン語基本例文集』札幌：北海道大学文学部
- 津曲敏郎 1981「満州語の動詞語尾-*me*について」『北方文化研究』14：149-172. 北海道大学文学部附属北方文化研究施設
- 津曲敏郎 1996「中国・ロシアのツングース諸語」『言語研究』110: 177-191
- 津曲敏郎 2002『満洲語入門20講』東京：大学書林
- 李林静 2006『ホジェン語の動詞構造』【博士論文】千葉大学大学院社会科学文化研究科
- 李林静 2011「ホジェン語の会話テキスト (1)」『北方言語研究』1: 197-216. 北方言語ネットワーク編 札幌：北海道大学大学院文学研究科
- 李林静 2012「ホジェン語インタビューテキスト (1): お産について」『北方言語研究』3: 183-216. 北方言語ネットワーク編 札幌：北海道大学大学院文学研究科
- An, Jun 1986 *Hezheyu Jianzhi* (=A Sketch of Hezhe Language). Beijing: minzu chubanshe.
- Avrorin, Valentin A. 1961 *Grammatika Nanajskogo Jazyka*, vols 2. Leningrad: AN. SSSR.
- Avrorin, Valentin A. 2000 *Grammatika Man'chzhurskogo Pis'mennogo Jazyka*. Sankt-Peterburg: Nauka.
- Avrorin, Valentin A. & B. V. Boldyrev. 2001 *Grammatika Orochskogo Jazyka*. Novosibirsk: izdatel'stvo. SO RAN.
- Benzing, Johannes 1955 *Lamutische Grammatik*. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Benzing, Johannes 1956 *Die Tungusischen Sprachen: Versuch einer vergleichenden Grammatik*. Wiesbaden.
- Bisang, Walter 1995 Verb serialization and converbs-differences and similarities. *Converbs in Cross-Linguistic Perspective*: 137-188. Haspelmath, M. & E. König (eds.) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Bulatova, Nadezhda & L. Grenoble 1999 *Evenki*. München / Newcastle: Lincom Europa.
- Cincius, Vera I. 1982 *Negidal'skij Jazyk: issledovanija i materialy*. Leningrad: Nauka.
- Choi, Dongkwon et al. 2012a *Cengeonogeoldaesinseok* (=Nogeoldae in Manchu). Seoul: Pakmunsa.
- Choi, Dongkwon et al. 2012b *Beye i cooha bade yabuha babe ejehe bithe* (=The book in which I wrote what I remembered in the war). Seoul: Pakmunsa.
- Dixon, Robert M. W. 2009 The semantics of clause linking in typological perspective. *The Semantics of Clause Linking*: 1-55. R. M. W. Dixon & A. Y. Aikhenvald (eds.) Oxford University Press.
- Girfanova, Albina H. 2002 *Udeghe* München / Newcastle: LINCOM EUROPA.
- Gorelova, Liliya M. 2002 *Manchu Grammar: handbook of oriental studies, Section 8. Central Asia vol. 7*. Leiden / Boston / Köln: Brill.
- Haspelmath, Martin 1995 The converb as a cross-linguistically valid category. *Converbs in Cross-Linguistic Perspective*: 1-55. Haspelmath, M. & E. König (eds.) Berlin / New

- York: Mouton de Gruyter.
- Ikegami, Jiro 2001a The verb inflection of Oroch. In: *Tsunguusugo Kenkyuu*: 24-72. Tokyo: Kyuukoshoin (First appeared in: 1959, *Kokugo Kenkyu* No. 9: 34-73. Kokugakuin Daigaku Kokugokenkyukai, Tokyo).
- Ikegami, Jiro 2001b Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprache. In: *Tsunguusugo Kenkyuu*: 395-396. Tokyo: Kyuukoshoin (First appeared in: 1974, *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker*, Protokollband der XII. *Tagung der Permanent international Altaische Conference 1969 in Berlin*: 271-272. Berlin Akademie Verlag).
- Kim, Juwon 2011 *A Grammar of Even*. Seoul: Seoul National University Press.
- Kolesnikova, V. D. & O. A. Konstantinova 1968 Negidal'skij jazyk. *Mongol'skie, Tunguso-Man'chzhurskie i Paleoaziatskie Jazyki*: 109-128. Skorik, P. R. (ed.) Leningrad: Nauka.
- Konstantinova, O. A. 1968 Evenkijskij jazyk. *Mongol'skie, Tunguso-Man'chzhurskie i Paleoaziatskie Jazyki*: 68-87. Skorik, P. R. (ed.) Leningrad: Nauka
- Kormushin, Igor V. 1998 *Udyxejskij Jazyk*. Moskva: Nauka.
- Li, Gertraude R. 2000 *Manchu A Textbook for Reading Documents*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Li, Shulan & Q. Chong 1986 *Xiboyu Jianzhi* (=A Short Description of Sibe Language). Beijing: Minzuchubanshe.
- Malchukov, Andrej L. 1995 *Even*. München / Newcastle: Lincom Europa.
- Nedjalkov, Vladimir P. 1995 Some typological parameters of converbs. *Converbs in Cross-Linguistic Perspective*: 97-136. Haspelmath, M. & E. König (eds.) Berlin / New York: Mouton de Gruyter
- Nedjalkov, Igor V. 1995 Converbs in Evenki. *Converbs in Cross-Linguistic Perspective*: 441-463. Haspelmath, M. & E. König (eds.) Berlin / New York: Mouton de Gruyter.
- Nedjalkov, Igor V. 1997 *Evenki*. London: Routledge.
- Nikolaeva, Irina & M. Tolskaya 2001 *A Grammar of Udihe*. Berlin / New York: Mouton de Gruyter.
- Norman, Jerry 1974 A sketch of Sibe morphology. *Central Asiatic Journal* 18: 159-174.
- Novikova, K. A. 1968 Evenskij jazyk. *Mongol'skie, Tunguso-Man'chzhurskie i Paleoaziatskie Jazyki*: 88-108. Skorik, P. R. (ed.) Leningrad: Nauka.
- Petrova, Taisija I. 1967 *Jazyk Orokov (Ul'ta)*. Leningrad.
- Poppe, Nicholas 1931 *Materialy po Solonskomu Jazyku*. Leningrad: Izd-vo Akademii Nauk SSSR.
- Poppe, Nicholas 1965 *Introduction to Altaic Linguistics*. Wiesbaden.
- Ramstedt, Gustaf J. 1952 *Einführung in die Altaische Sprachwissenschaft* II, Helsinki.
- Shnejder, E. P. 1936 *Kratkij Udegejsko-Russkij Slovar'*. Moskva / Leningrad: Gosudarstvennoe uchebno-pedagogicheskoe izdatel'stvo.
- Sunik, Orest P. 1985 *Ul'cskij Jazyk*. Leningrad: Nauka.
- Sung, Baekin 1968 Manzueo muneoeu pudongsa eomi *-me* e daehayeo (=On Manchu converb

- ending *-me*). *Hangeul* No.142: 72-102. Korean Language Research Society.
- Tamura, Kenichi 2008 Grammatical suffixes of Hezhen: with the text ‘Antu Mergen’ and its English and Japanese translations. *Bulletin of Aichi University of Education Humanities and Social Sciences* 57. Aichi: Bulletin of Aichi University of Education: 37-54.
- Tsumagari, Toshiro 1997 Linguistic diversity and national borders of Tungusic. H. Shoji & J. Janhunen eds. *Northern minority languages: problems of survival (Senri Ethnological Studies* No.44): 175-186. Suita: National Museum of Ethnology
- Tsumagari, Toshiro 2009a A sketch of Solon grammar. *Journal of the Center for Northern Humanities*, 2: 1-21. Center for Northern Humanities, Graduate School of Letters, Hokkaido University.
- Tsumagari, Toshiro 2009b Grammatical outline of Uilta (Revised). *Journal of the Graduate School of Letters* 4: 1-21. Sapporo: Graduate School of Hokkaido University.
- Vasilevic, Glafira M. 1936 *Sbornik Materialov po Evenkijskomu (tunguskomu) Fol'kloru*. Leningrad.
- Zakharov, Ivan I. 1897 *Grammatika Man'chzhurskogo Jazyka*. St. Petersburg.
- Zhang, Paiyu 2013 *The Kilen language of Manchuria: a grammar of a moribund Tungusic language*. University of Hongkong.

Functional Differences of Converb *-mi* in Tungusic

Sangyub BAEK

(Graduate School of Letters, Hokkaido University)

A converb form originated from **-mi* is commonly used in the Tungusic languages. Previous studies (Benzing 1956, Kazama 2003) pointed out that the converb *-mi* had slightly different functions among the Tungusic languages. The present study aims to examine that the function of converb *-mi* prominently varies according to the distribution (Russian / Chinese territory) of the Tungusic languages. In this paper, we employ the typological parameters from the cross-linguistic studies of converb (Haspelmath et al. 1995). In conclusion, it is proved that there are remarkable differences between Russian Tungusic (Evenki, Udihe and Nanay) and Chinese Tungusic (Solon, Hezhen and Manchu) as follows: both in the morpho-syntactic features (number marking, verb serialization and quotative marker) and in the semantic functions (purposive and condition). Therefore, it is presumed that the areal factor is strongly related to the functional differences of converb *-mi* among Tungusic.

(ベック・サンヤップ iyairaykere@hotmail.co.jp)